

若菜のうち

泉鏡花

青空文庫

春の山——と、優に大きく、申出でるほどの事ではない。われら式のぶらぶらあるき、彼岸もはやくすぎた、四月上旬の田畝路は、些とのぼせるほど暖い。

修善寺の温泉宿、新井から、——着て出た羽織は脱ぎたいくらい。が脱ぐと、ステッキの片手の荷になる。つれの家内が持つて遣うというのだけれど、二十か、三十そこそこで双方容子が好いのだと野山の景色にもなるもの……紫末濃でも小桜緘でも何でもない。茶縞の布子と来て、堇、げんげにも恥かしい。……第一そこらにひらひらしている蝶々ちようちようの袖そでに対して、果報ものの狩衣かりぎぬではない、衣装持いしやうもちの後見こうけんは、いきすぎ

よう。

汗ばんだ猪首いくびの兜かぶと、いや、中折なかおれの古帽を脱いで、薄くなつた折目を気にして、そつと撫なでて、杖つえの柄えに引つ掛けて、ひよいと、かつぐと、

「そこで端折はしよつたり、じんじんばしより、頬かぶり。」
と、うしろから婦おんながひやかす。

「それ、狐がいる。」

「いやですよ。」

何を、こいつら……大みそかの事を忘れたか。新春よみの読よみものだからといって、暢気のんきらしい。

田畑を隔てた、桂川かつらがわの瀬の音も、小鼓こつづみに聞えて、一方、

なだらかな山やまふところ懐なごみに、桜の咲いた里景色さとげしき。

薄い桃ももも交まじつていた。

近くに藁屋わらやも見えないのに、その山裾やますその草の径みちから、ほかほかとして、女の子が——姉きょうだい妹いらしい二人づれ。……時間を思つても、まだ小学校前らしいのが、手に、すかんぼも茅花つばなも持たないけれど、摘み草の夢の中を歩行あるくように、うつとりとした顔をしたのと、径みちの角で行逢ゆきあつた。

「今日は、姉ねえちゃん、蕨わらびのある処ところを教えてくださいな。」

肩かたに耳みみの附着くつつくほど、右へ顔を傾けて、も一つ左へ傾けたから、「わらび——……小さなでもいいの、かわいらしい、あなたのような。」

この無遠慮な小母おぼさんに、妹はあつけに取られたが、姉の方は
頷うなずいた。

「はい、お煎餅せんべい、少しですよ。……お二人でね……」

お駄賃だちんに、懐紙かいしに包んだのを白銅製のものかと思うと、銀の小
粒で……宿の勘定前だから、怪しからず氣前が好い。

女の子は、半分氣味の悪そうに狐つまに魅まれでもしたように掌てのひらに
受けると——二人を、山裾やますそのこの坂口まで、導いて、上へ指さ
しをした——その来た時とおんなじに妹の手を引いて、少しせき
足あしにあの徑みちを、何だか、ふわふわと浮いて行く。……

さて、二人がその帰り道である。なるほど小さい、白魚しらうおばか
り、そのかわり、根の群青ぐんじょうに、薄く藍あいをぼかして尖さきの真まむらさ

紫きなのを五、六本。何、牛うしに乗らないだけの仙家せんかの女めの童わらわの指し
 示めしである……もつと山高やまたかくく、草深くさふかく分入わけいればだけでも、それに
 はこの陽気やうきだ、蛇じやたい体たいという障しょう碍がいがあつて、望のぞむものの方に、
 苦く行ぎやうが足りない。で、その小こさなのを五、六本。園その女じよの鼻紙はなぢ
 の間に何なにとかいいう堇すみれに恥はづれよ。懐なつかしにして、もとの野道のちみちへ出ると、小
 鼓こは響ひびいて花菜はななは眩まぼい。影かげはいない。——彼か処しこに、路みち傍ばたに咲さき
 残のこつた、紅梅こうばいか。いや桃ももだ。……近ちかくに行いつたら、花おのが自ずら、
 ものを言いおう。

その町まちの方ほうへ、近ちかづくつと、桃ももである。根ねに軽かろく築ついた草くさ堤づつみ
 の蔭かげから、黒くろい髪かみが、額ひたいが、鼻はなが、口くちが、おおお、赤あかい帯おびが、おおな
 じように、揃そろつて、二人ふたり出でて、前ぜん刻こくの姉き妹ようだいが、黙もくつて……

襟えり肩かたで、少しばかり、極りが悪いか、むずむずしながら、姉が二本、妹が一本、鼓草たんぽぽの花を、すいと出した。

「まあ、姉ねえちゃん。」

「どうも、ありがとう。」

私も今はかぶっていた帽を取って、その二本の方を慾張よくばった。

とはいえ、何となく胸に響いた。響いたのは、形容でも何でもない。川音がタタと鼓草たんぽぽを打って花に日の光が動いたのである。濃く香かぐわしい、その幾重いくえの花葩はなびらの裡うちに、幼兒おさなごの姿は、二つながら吸われて消えた。

……ものには順がある。——胸のせまるまで、二人が——思わず熟じつと姉きょうだい妹いの顔みまもを瞻みまもった時たちま、忽たちまち背中で——もお——と鳴い

た。

振向くと、すぐ其処そこに小屋があつて、親が留守こうしの犢しが光つた鼻を出した。

——もお——

濡れた鼻息は、陽かげろう炎に蒸されて、長閑のどかに銀粉ぎんぶんを刷はいた。その隙ひまに、姉きょうだい妹は見えなくなつたのである。桃の花の微笑ほほえむ時、黙つて顔を見合せた。

子のない夫婦は、さびしかった。

おなじようなことがある。様子はちよつと違つているが、それも修善寺で、時節は秋の末、十一月はじめだから、……さあ、もう冬であつた。

場所は——前記のは、桂かつらがわ川のぼを上る、大師だいしの奥の院へ行く本道と、溪流を隔てた、川堤の岐路えだみちだった。これは新停車場しんていしゃじょうへ向つて、ずっと滝の末ともいおう、瀬の下で、大仁通おおひとがよいの街道を傍わきへ入つて、田畝たんぼの中を、小路へ幾つか畝うねりつつ上つた途中であつた。

上等こはるびよりの小春日和で、今日も汗ばむほどだったが、今度は外套を脱いで、杖の尖さきには引つ掛けなかつた。行ると、案山子かかしを抜いて来たと叱られようから。

婦おんなは、道端やぶの藪のぞを覗き松の根を潜くぐつた、竜胆りんどうの、茎の細いのを摘んで持った。これは袂たもとにも懐にも入らないから、何に對し、誰たれに恥たれていいか分らない。

「マッチをあげますか。」

「先ず一服だ。」

安煙草やすたばこの匂においのかわりに、稲の甘い香かが耳まで包む。日を一杯に吸って、目の前の稲は、とろとろと、垂穂たりほで居眠りをするらしい。

向って、外套の黒い裙すそと、青い褌つまで腰を掛けた、むら尾花おぼなつらなの連つて輝く穂は、キラキラと白銀はくぎんの波である。

預けた、竜胆の影が紫の灯ひのように穂をすいて、昼の十日ばかりの月が澄む。稲の下にも薄すすきの中にも、細流せせらぎの囁ささやくように、ちろちろと声がして、その鳴く音ねの高低たかひくに、静まった草もみじが、そこらの刈かりあとにこぼれた粟あわの落穂とともに、風のない

のに軽く動いた。

ふもと

麓を見ると、塵焼場だという、煙突が、豚の鼻面のように低

あおむ

く仰向いて、むくむくと煙を噴くのが、黒くもならず、青々と一

とすじたちのぼ

条立騰って、空なる昼の月に淡く消える。これも夜中には幽

霊じみて、旅人を怯かそう。——夜泣松というのが丘下の山

でばな

の出端に、黙った鳥のように羽を重ねた。

からす

「大分上つたな。」

のぼ

「帰りますか。」

ひとふんぼつ

「一奮発、向うへ廻ろうか。その道は、修善寺の裏山へ抜けら

れる。」

ななめ

一廻り斜に見上げた、尾花を分けて、稲の真日南へ——スツと

おばな

まひなた

低く飛んだ、赤蜻蛉あかとんぼを、挿かざしにして、小さな女の児こが、——また二人。

「まあ、おんなじような、いつかの鼓草たんぼぼのと……」

「少し違うぜ、春のが、山姫のおつかわしめだと、向うへ出たのは山の神の落子おとしごらしいよ、柄がらゆきが——最ももつと今度の方はお前には縁えんがある。」

「大ありですね。」

と荒びた処ところが、すなわち、その山の神で……

「第一、大すきな柿を食べています。ごらんなさい。小さい方が——」

「どツちでも構わないが、その柿々をいうな、というのに——柿

々というたびに、宿のかみさんから庭の柿のお見舞が来るので、ひやひやする。」

「春時分は、たけのこ筍が掘つて見たい筍が掘つて見たいと、御主人を驚かして、そうざいお惣菜にありつくのは誰さ。……ああ、おいしそうだ、ほつぺた頬辺から、つゆ菓汁が垂れているじゃありませんか。」

横なでをしたように、妹の子は口も頬も——じゆくし熟柿と見えて、
 だらりと赤い。姉は大きなのを握つていた。

よだれ涎も、はな涙も見えるところ処で、

「その柿、おくれな、おぼ小母さんに。」

とだしぬけ唐突にいった。

昔は、せんりゆう川柳に、くまさか熊坂のすね脛のあたりで、みいん、みいん。

で、薄すすきの裾すそには、蟋蟀こおろぎが鳴くばかり、幼児おなきごの目には鬼神きしんのお松だ。

ぎよつとしたろう、首をすくめて、泣出なきだしそうに、ベそを搔いた。

その時姉が、並んで来たのを、衝つと前へ出ると、ぴつたりと妹をうしろに囲うと、筒袖つつそでだが、袖を開いて、小腕こぶで庇かばつて、いたいけな掌てのひらをパツと開いて、鏝やじりの如く五指を反らした。しかして、踏留ふみとまつて、睨にらむかと目をみはった。

「ごめんよ。」

私が帽子を取ると齊ひとしく、婦おんながせき込んで、くもった声で、

「ごめんなさい、姉ねえちゃん、ごめんなさい。」

二人は、思わず、ほろりとした。

宿の廊下づたいに、湯に行く橋がかりの欄干らんかんずれに、その名め
樹いじゆの柿が、梢を暗く、紅日こうじつに照っている。

二羽。

「雀がいる。」

その雀色すずめいろどき時。

「めじろですわ。」

青空文庫情報

底本：「鏡花短篇集」岩波文庫、岩波書店

1987（昭和62）年9月16日第1刷発行

2001（平成13）年2月5日第21刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十七卷」岩波書店

1942（昭和17）年10月初版発行

初出：「大阪朝日新聞」

1933（昭和8）年2月5日

入力：門田裕志

校正：米田進、鈴木厚司

2003年3月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

若菜のうち

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>